

## 田園俳人松本椿年の生涯と作品（六）

——昭和五十年代（超高齢期）のライフイベントと作品——

宮 川 充 司\*

俳人松本椿年（本名松本傳次郎）は、明治二十年（一八八七）七月七日に静岡県駿東郡中嶋村（現在の静岡県駿東郡小山町中島）の旧家に生まれ、昭和六十一年（一九八六）二月八日に生涯を閉じた地方俳人である。十歳の頃から、俳句の宗匠でもあった父親から俳号と俳句の手ほどきを受け、その父親の没後から最晩年満九八歳で生涯を閉じる臨終ぎりぎりの所まで、ほぼ一世紀に亘る日本社会の激動期を、農村の中で生活に密着した句作とともに生きた俳人である。この俳人について、宮川（二〇一六、二〇一七）では、この俳人の年譜の試作版として、誕生から死に至るまでの個人史を判明している出来事から作成した。この俳人の作風は、単なる想像や言葉遊びの手法で俳句を作るのではなく、農作業の傍ら体験する自然の観察や生活の中で出会った出来事や感動を、そのまま作品とする生活俳句が本領であり、また「習作期」と「投句休止期」と名付けた時代を除き、月刊を基本とするいくつかの俳句誌にはほぼ毎号のように投句を続けていたので、俳句誌が現存しているものについては、作品の発表時期を特定することが可能と考えられた。

宮川（二〇一八）では、昭和初期から昭和三〇年代までの俳句作品を分析し、それから推定構成したライフイベントから、その期間の個人史を作成した。

昭和初期の俳句作品として、加納野梅が主宰の俳誌『新草』の創刊号（昭和四年五月）から第四〇号（昭和七年八月号）までの掲載句から選句編集し、昭和七年（一九三二）に刊行した『新草俳句集』（国立国会図書館デジタルコレクションとして公開）に収録されている松本椿年三十四句のうち、作句の背景が読み解けなかったいくつかの昭和初期作品の推定解説を行った。主宰の加納野梅は、大正リベラリズムの中で登場したジャーナリスト出身の俳人としても知られていたため、他誌で扱われない作風の句も投句されていた。

昭和四年四月に椿年の母校静岡県駿東郡小山町成美尋常高等小学校に、渡辺水巴主宰の俳誌『曲水』の選者でもあった古見豆人（本名古見一夫）が校長として着任し、その推薦により、『曲水』の投句が始まった。椿年の『曲水』投句掲載は、第十四卷第十号（昭和四年七月号）から第二十卷第一号（昭和十年一月号）までであった。

古見豆人を中心に、幼なじみで富士紡績小山工場に勤めていた早間冬青子や坂本緑村らと、社外の俳人湯山素鷗や湯山逸素らを加えて、「あゆみ句会」が起こされた。俳句の師古見豆人が昭和四年（一九二九）四月に静岡県駿東郡小山町で起こしたあゆみ吟社は、昭和六年一月には大富士吟社となり月刊俳誌『大富士』の刊行へと発展した。また、豆人が昭和十三年（一九三八）四月に東京世田谷に転居したことにより、中央の主要な俳誌の一つとなっていた。

この『大富士』への椿年の投句は、第二次世界大戦が始まり戦禍が拡大していく昭和十六年（一九四一）四月号を最後に中断され、昭和二十三年（一九四八）三月頃一時再投稿の痕跡が見られたが、再び完全復帰したのは昭和二十八年（一九五三）七月からであった。

この昭和初期から戦後に亘る椿年の投句活動の中心であった『大富士』も、昭和三十三年十一月二十二日、主宰古見豆人が急逝したことにより第二十八巻第十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊となった。椿年が俳句誌の世界に復帰してから、わずか五年の歳月が流れたところであった。

古見豆人が逝去した翌年一月、古見一夫（豆人）が静岡県韮山町（現在の伊豆の国市）の韮山尋常高等小学校長をしていた時の教え子の一人で、門人でもあった小笠原龍人が、『大富士』の後継誌として、俳誌『塔』を創刊し、塔俳句会を起こした（小笠原、一九七四）。俳誌『塔』は、椿年の遺品として松本家に残されている俳句誌に二号分が現存している。第十一巻第十一号（昭和四十四年十一月号）と第二十五巻第九号（昭和五十八年九月号）の二号のみであり、その俳誌への椿年の投句状況は判然としなかった。しかし、俳誌『塔』は、公益法人俳人協会が運営する俳句文学館に、初期の刊行巻号から、多くの巻号が収集所蔵されている。第一巻第十

号（昭和三十四年十月号）の一号を除けば、比較的継続的に収集されているのは、第五巻第七号（昭和三十八年七月号）以降の巻号であり、しかもかなりの欠巻欠号がある。『塔』の所蔵館として、埼玉県立熊谷図書館埼玉資料室が、多くの巻号を所蔵しているが、第十巻第一号（昭和四十三年一月号）以降のものに限定され、しかも同様に、多くの欠号がある。この二館の所蔵する巻号から、椿年の掲載句の資料を作成した。まず、俳句文学館所蔵の第一巻第十号を閲覧したところ、椿年の句は「水煙集 同人作品」に五句（二頁）、「塔俳句 小笠原龍人選」に四句（二三頁）掲載されていた。

俳誌『塔』をもっとも体系的に所蔵しているのが、日本俳句文学館であるが、なお欠巻欠号が多く、ある程度継続的に収集しているのは、第五巻第七号昭和三十八年七月号からである。欠巻欠号の一部は埼玉県立熊谷図書館所蔵のもので補うことが可能であった。日本の古本屋というネットワークで、欠号を探して見たところ、偶然創刊号を見つけ購入した。ただし、小笠原龍人が余程急いで創刊したためか、大富士同人の句は少なく、椿年や周辺の俳人の掲載句はなかった（宮川、二〇一八）。この創刊号は、現在は日本俳句文学館に寄贈し、同館所蔵となっている。丁度前稿を書き終えた頃、日本俳句文学館の欠号となっている第一巻十一号（昭和三十四年十一月号）と第二巻第二号（昭和三十五年二月号）の継続した四号分が売りに出ているのを発見し購入した。このわずか四号分の欠号入手であるが、やはり年譜の上で重要な出来事が含まれていた。これらの俳誌『塔』について、日本俳句文学館の欠号となっていた第一巻十一号（昭和三十四年十一月号）と第二巻第二号（昭和三十五年二月号）に掲載の松本椿年の年譜に關わる事項、あるいは椿年の掲載句については、宮川（二〇二〇）で詳細な分析報告を行った。

その第一卷十一号（昭和三十四年十一月号）は『豆人先生一周忌追悼号』というタイトルが付けられているが、「特集 豆人先生の思い出」欄があり、九人の同人がエッセイを寄せている。その中に、二つのエッセイに椿年と豆人との関係で注目すべき記述があった。『塔』第一卷十一号追悼号「水煙集 同人作品」（二〇頁）に寄せた椿年の句は、次の五句であった。

追憶

——とろ、飯亡き師の記録十二碗  
亡き師への追憶うすれ頼祭忌  
ステッキにより来し友や頼祭忌

（つばき句集四〇頁 句集老稚一八四頁）

子規の忌や小康を得て句座尻に

（つばき句集四〇頁 句集老稚一八四頁）

糸瓜忌や師の記憶新たにす

（『塔』第一卷十一号 昭和三十四年十一月号 水煙集 同人作品 二〇頁）

椿年の『塔』への投句は最晩年の昭和五十九年一月号第二十六卷第一号（通卷三〇〇号）まで続き、最も継続的な投句期間が長い俳誌であった。

『大富士』『塔』とともに、椿年が多くの作品を投句した俳誌は、原田濱人が主宰した『みづうみ』（みづうみ発行所）である。

『みづうみ』への投句は、原田濱人の門人でもあった湯山素鷗や湯山逸素らの奨めによるものと考えられるが、その同人参加の契機

となった出来事として、昭和三十五年十月の静岡県小山町と山梨県境にある簗坂峠の原田濱人句碑の除幕式があった。この句碑建立の委員長は湯山逸素であり、椿年もこの除幕式に参加していた。『みづうみ』第三二三号掲載の椿年本人が書き残したエッセイ『私の雅号』（松本、一九六六）や、湯山逸素の句集『逸素句集』（湯山、一九六九）に掲載されている逸素の年譜からの推定である。椿年の『みづうみ』への投句は、第二五六号（昭和三十六年五月号）からであり、昭和三十六年一月からの参加であったと推定できる。『みづうみ』への投句は、昭和五十八年十一月の第五二六号 昭和五十八年十一月号の竿頭欄四句（四頁）で終結している。『塔』と並び、最晩年までのかなり長い期間にわたって投句された俳誌であった。

この俳誌ばかりは、昭和三十六年五月号（第二五六号）から昭和五十八年十一月号（第五二六号）までかなりの巻号が遺品として保存されている。ただし、この遺品も多くの欠号があり、それらの欠号について俳句文学館所蔵の閲覧調査を行ったが、それらの欠号補完分にも多くの椿年の掲載句がある。さて、その『みづうみ』についても、昭和五十八年十一月号までの閲覧収集作業を行った。ただし、日本俳句文学館所蔵の『みづうみ』は、第五〇八号（昭和五十七年5月号）と第五七三号（昭和六十二年十月）まで欠号となっており、椿年の『みづうみ』掲載句は、遺品として残されていた第五二六号（昭和五十八年十一月号 竿頭欄 四頁）の掲載句を最後として以後確認ができない。

昭和三十年代は、昭和三十年（一九五五年）五月の妻すみとの死別から始まり、昭和三十三年（一九五八年）十一月の俳句の師古見豆人の急逝、昭和三十一年一月孫娘京子の婚姻、三月の俳人湯山素

鷗の死、七月の椿年の喜寿の祝と慶弔様々な出来事で終わっている。

昭和四十年代は、昭和四十年三月の湯山素鷗の一周期追善句会、同年九月嗣子辰雄の病死という更に悲しい出来事で始まった。

昭和四十五年（一九七〇）『句集 老稚』の刊行である。この句集には、明治三十一年（一八九八）十歳頃から昭和四十四年（一九六九）頃までの大凡七十年間に亘る七百四十八句が収録されている。その句集の元になったものに、手書きの『つばき句集』と題した草稿本が椿年の遺品として残されている。この『つばき句集』の執筆年代は、昭和三十四年から四十四年までの俳誌への発表作品が含まれていた。

昭和四十年代の終わりは、昭和四十八年（一九七三）三月の同年齡の俳句の盟友前田岳人が天寿を全うした。椿年、岳人とも八十五歳となっていた。椿年の悲嘆ぶりは次の二句から推測されるものであった。

次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ （『第二句集 限界』八十頁）

花冷えの土かけて永遠の別れかな （『第二句集 限界』八十頁）

（『みづうみ』第四百二号昭和四十八年七月号）

昭和四十九年三月、米寿の祝。孫や曾孫に囲まれ、平穩な最晩年を象徴する出来事となった。

子孫曾孫うらかに顔を揃えけり

（『塔』第十六卷第八号 昭和四十九年八月号 塔俳句 小

笠原龍人選八頁）

また、その年の十二月には、みづうみ小山支部による松本椿年翁米寿祝賀句会が藤曲公民館（十二月一日）で開催された（岩田、一九七二）。その句会で吟じた句、

霜濃ゆく降りしゆふべの焚火跡

（『みづうみ』第四百二二号 昭和五十年二月号 小山支部「松本椿年翁米寿祝賀句会の記」三三頁）

穏やかな昭和四十年代の終わりと、椿年の超高齡期の訪れであった。

俳人としての松本椿年を彩る昭和四十年代の出来事（宮川、二〇一九）は、これまでの収集した資料を基に、椿年の年譜を再構成したものを末尾の資料に掲載する。本稿で、主に検討するのは椿年の最晩年（超高齡期）にあたる昭和五十年代の作品を中心に、超高齡期の主な出来事を記載する。

比較的平穩な超高齡期と作品

昭和五十年以降の椿年俳句と出来事

昭和五十年（一九七五年）、満八十七歳から八十八歳となる年である。昭和五十年初頭の三句。『みづうみ』一月号には「名刺交換」という欄があり、同誌の同人・誌友が年賀状のように念頭の挨拶を一句で述べるものである。前年に米寿の祝いを済ませ、この年満八十八歳になる椿年の挨拶である。荒波を抜けてきたのは、日の出だけではなく、まさに椿年の人生そのものという表現であろう。第二句はみづうみ小山支部の初句会での様子を吟じたものであるが、耳遠き同志の話とは、大きな声で話をしているがどこかかみ合わない、くっておかしみがあるというユーモラスな光景であるが、その一人は椿年自身であろうか。第三句は八十八歳ともなると、冬の農作業は体にきつくなっているということだろうか。

荒波をぬけし米寿の初日の出

『みづうみ』第四二〇号 昭和五十年一月号 頌春 名刺交換 四十頁

耳遠き同志の話初笑

『みづうみ』第四二二号 昭和五十年三月号 各地句会報  
小山支部句会報 一月十二日 逸素先生宅 幸山報  
三三頁

冬耕や苦悩の眉を空に向け

〔塔〕第十七卷第三号 昭和五十年三月号 水煙集 同人  
作品二十八頁

この年の『塔』六月号第十七卷第六号翠雲抄には、松本椿年の欄が設けられ、「剪定」という題と八句、「俳句昔話」と題する椿年の小エッセイが掲載されている。八句のうち第一句と第八句は超高齡期になってもなお農作業に勤しむ椿年の姿を捉える。第三句の友訪えはの句、気さくな椿年らしい作品であるが、相手の友とは誰のことだろう。

剪定

青空を背負い腕を背麦を踏む  
如月や割りし戸硝子金音す  
友訪えば裏より返事梅に立つ  
日陰梅却つて早く花見せし  
屋敷神椿の落花しきつめて  
剪定の蜜柑かるがる枝伸ばし  
波先の暮色梅林人まばら  
年毎に鉋重くなり畑打ち

俳句昔話

私は明治生れの八十八才である。  
父は吉野庵禾裕と号し田舎宗匠であった。  
明治三十年当時は、俳諧師と称し諸国を遍歴する俳人がいて父の



処へも年に四、五人は見え草履銭と言ひ幾許を受けてすぐ帰る人、二、三日滞在する人、中には年に二回も来て十日も二十日も逗留する人もいた。

昔は今の句会を連座と言つて、折句、冠踏、字結びの句作であった。半紙を半折して巻を作り巻尾四、五枚を空白にし各自の句を筆達者が清書し別室に控える宗匠に選を乞う。宗匠はこれに七五三の点印を捺し巻尾の空白へ、前拔五句三光三句を書き入れ前拔は何点三光は何点増しとし合点して最高点者が天位となり落巻景品と栄誉をかちとる仕組みであった。（椿年）

『塔』第十七卷第六号 昭和五十年六月号 翠雲抄 四頁八句  
（上段）小文（下段）

この年の九月、『みづうみ』を起こした原田瀧人の長男で、シベリア抑留と昭和の恋多き俳人として知られる原田喬が俳誌『樵』を創刊、誘いを受けて同人参加。この『樵』が、最晩年の最後まで投句を続けた俳誌となった。その創刊号に掲載された三句。第一句植うる田の句は、いかにも椿年らしい句である。田植えをする田の一角それぞれに富士山の雲が映っているという句。第二句は恐ろしい電が降った後のほっとした瞬間小さな電のかけらを草の根元に見つけたのを吟じた句である。栗の花の咲く初夏に亡くなった高齢者の葬儀は、高齢者ばかりという光景をそのまま素直に作品とした。

植うる田の一角富士の雲落とす  
電蒼く解けつつ草の根に溜る  
会葬者老人多し栗の花

『樵』第一号創刊号 昭和五十年九月 樵集 原田喬選

## 二十二頁

次は昭和五十年の秋耕の句であるが、すこぶる壮健とはいえ八十八歳の高齢となったが、それでもまだ農夫として現役である。

鰯雲鋏突立てて背を伸ばす

『塔』第十八卷第一号 昭和五十一年一月号 塔俳句 小笠原龍人選十八頁

いみじくも知事杯賜う天高し

『塔』第十八卷第二号 昭和五十一年二月号 塔俳句 小笠原龍人選十一頁

また、この年の十一月には静岡県知事杯を受けている。

昭和五十一年（一九七六年）、八十八歳から八十九歳となる年である。俳誌『みづうみ』の年頭の挨拶の句である。季語の室の花（室咲）は、文字通り温室で育てた花で、冬の季語。椿年のおびただしい作品の中で、この季語はこの句以前には一度も使われたことがなく、不思議に思つて、椿年の内孫にあたる井上奈美江氏に晩年の椿年が温室で花を栽培したことがあるのかどうかと尋ねてみた（二〇二〇年九月十二日私信メール返信）ところ、「温室で花を育てていたような記憶は家族はだれもない」という回答だった。その十日後にいただいた追加情報では、「お歳暮でシクラメンの鉢をいただいていたのを思い出しました。姉に聞きましたら、葉牡丹の鉢もあったねと、蘭などの花は育てていないとのことでした」（二〇二〇

年九月二十二日私信メール）というようなことも教えていただいた。また、その句を掲載した昭和五十一年の表紙絵はカトレアの花の絵が使われていた。偶然にしては、できすぎているところがあるので、その挿絵の作者を調べてみると、梶本秋桑という椿年の住んでいた小山町の隣にある御殿場市で本業の歯科医院を開いていた俳人であった。句会を通して親交のあった俳人である。とすると、室の花はその表紙絵となった梶本秋桑が栽培していたカトレアそのもので、次の第三句の「老の生き甲斐」は椿年の自画自賛ではなく秋桑の丹精を褒めたことで、また第四句はその温室の光景を句としたものとするとその温室も見せていただいていたのではないだろうか。また、昭和五十一年の表紙絵が秋桑の描いたカトレアの絵になることも伝え聞いていたのではないかと考えると、なお椿年のユーモラスな一端を伝えるものではないだろうか。

また、第二句は数えの九十歳となったまだ足腰もしっかりしている椿年の自己の姿の描写である。この年になって「しかと踏み立つ」とは、余人には表現できない姿であろう。

玄関に入る風にゆれ室の花 椿年

〔『みづうみ』第四三二号 昭和五十一年新年号 名刺交換  
四十一頁〕

九十才しかと踏み立つ初日影

〔『みづうみ』第四三三三号 昭和五十一年二月号 竿頭欄  
四頁〕

丹精は老の生き甲斐室の花

〔『みづうみ』第四三三三三号 昭和五十一年二月号 蛭雪欄（二  
月号） 佐野瓢雨選 三十頁〕

温度計蜘蛛がよじをり室の花

〔『みづうみ』第四三四号 昭和五十一年三月号 竿頭欄  
六頁〕

初鶏や嫁の挨拶はほがらかに  
嫁一人ふえてぬくとし雑煮の座

〔『塔』第十八巻第三号 昭和五十一年三月号 塔俳句 水  
煙集 同人作品二十六頁〕

この年、内孫典彦が前年結婚し、家族に孫の嫁を加えた正月を迎える。また、さらにこの年の内に内曾孫が生まれている。昭和三十年五月に妻のすみに先立たれ、また昭和四十年九月に嗣子の辰雄が病死するなど家族の不幸にも遭遇してきた椿年であるが、孫どころか曾孫にも囲まれた晩年の家族の風景である。こんな句が残されている。

また一人曾孫が増えたる年迎ふ

〔『塔』第十八巻第五号 昭和五十一年五月号 水煙集 同  
人作品三十三頁〕

麦飯に育ちこの齢まで生きし

〔『塔』第十八巻第十号 昭和五十一年十月号 塔俳句 小  
笠原龍人選九頁〕

また、第二句は、質素な農民としての自分の人生と生活を振り返った句である。

昭和五十二年（一九七七年）は、八十九歳から九十歳となる年である。前年末か年の初めに生まれた内曾孫のお喰い初めと初節句への喜びを吟じた椿年晩年の喜びを吟じた句である。目を細めてかわいらしい曾孫の姿を見つめる椿年の姿である。

春の月兎に喰ひそめの茶碗買ふ

『塔』第十九巻第九号 昭和五十二年九月号 塔俳句 小笠原龍人選十二頁）

よちよちと庭に出し兎や鯉鱈

『塔』第十九巻第八号 昭和五十二年八月号）

そんな幸せに満ちた晩年の作品であるが、時に不幸な出来事に遭遇することもあった。列車事故で人が亡くなった直後のショックキングな現場を目撃したのであろう。だが、この俳人はそれをも句としてしまう力が残っていた。この句については、原田濱人没後『みづうみ』の主宰となっていた大橋葉蘭の句評が残っている。

風や血のどす黒き轢死あと

『みづうみ』第四四六号 昭和五十二年三月号 竿頭欄七頁）

「風や血のどす黒き轢死あと 松本椿年  
偶々通りあわせて無残な跡を見た。風に吹き晒され、日光を反射

したりして次第にドズ黒く凝固していくのである。検証が済むまではそのままである。作者もひそかに嘆息しつつ通り過ぎたのである。」（句評 大橋葉蘭 三十頁）

この年のみづうみ小山支部の二月の句会で吟じた鋤始め句である。九十歳となるこの年、まだ農夫としても、田園俳人としても現役である。また、この句は同時期の作品とともに『みづうみ』四月号に掲載されている。

凍て土の腕にこたえし鋤始め

『みづうみ』第四四七号 昭和五十二年四月号 竿頭欄六頁）

同 支部句会報 小山支部句会 幸山報 二月十三日

小山町坂下湯山逸素宅三十八頁）

元日や客来ぬ畑をひとまわり  
確りと楔を締めて鋤始め  
凍て土の腕にこたえし鋤始め  
たくましく蕪莖立ちし墓の隅

『みづうみ』第四四七号 昭和五十二年四月号 竿頭欄六頁）

それでも、加齢を感じて杖がほしいこともあるという自己観察を句にしている。逆に言えば、その年になってもまた杖を使わないで自力で歩いていたということを示す句であろう。



杖ほしと思ふことあり春寒し

〔『塔』第十九卷第八号 昭和五十二年八月号 塔俳句 小笠原龍人選十一頁〕

まだまだ俳句仲間などと近くの旅行に出かける元氣も体力も残っていた。

温泉窓開ければ聞こゆ河鹿の音（中川温泉）

〔『塔』第十九卷第十号 昭和五十二年十月号 水煙集 同人作品四十七頁〕

中川温泉は隣町の神奈川県上尾柄郡山北町にある温泉であり、次の句は伊豆の韭山（現在の伊豆の国市）に旅行に出かけた記録である。

江川代官屋敷四句

秋風へでんと大白据へてあり  
叩き土間冷やりと入りし太柱  
裏庭は古木はかりや法師蟬  
こおろぎや大釜かけし土べつ

〔『塔』第二十卷第一号 昭和五十三年一月号 水煙集 同人作品三十九頁〕

猪の稲より移り甘蔗畑

〔『塔』第二十卷第二号 昭和五十三年二月号 水煙集 同人作品三十八頁〕

この年の秋のことである。田畑が猪に荒らされることも起きた。農民としては大変な災難であるが、こんなことも椿年は作品にしましう力が残っている。また、誰かが亡くなった。三句も『塔』に掲載されている処から見ると、俳句の仲間であった可能性も高いが、こうした出来事の手がかりが多い『みづうみ』は昭和五十三年一月号（一二月号（第四五六号）四五七号）は、日本俳句文学館でも欠号となったままであり、椿年の遺品もしかりで俳人であったとしても、特定するのが困難である。この時期の作品は、幸い『塔』に残されているので、かろうじてこの時期の作品を再現することができた。

鎌を手に猪害の稲に立ちつくす

コスモスへ倒れかかりし葬り旗

渡鳥葬り花輪に影落とす

一炷の香に秋ゆく七七忌

〔『塔』第二十卷第三号 昭和五十三年三月号 塔俳句 小笠原龍人選十一頁〕

昭和五十三年（一九七八年）、満九十歳から九十一歳となる年である。

くつきりと富士映る田へ植えに入る

〔『第二句集 限界』百二頁〕  
〔『塔』第二十卷第九号 昭和五十三年九月号 塔俳句 小笠原龍人選八頁〕

この句には、同号に『塔』主宰の小笠原龍人の句評がついている。

八十を越えてとあるが、この時実際には九十歳になっているので、さらに驚きというべきであろう。

「〇くつきりと富士映る田へ植えに入る

地理的な情景がすつきり描き出され、その印象的な風景の中に、作者の生々とした生活感、勤労意欲と云ったものが感じとれる。八十を超えてなほ、かくし、やくたるお姿が尊く眼に映る。」（選後に龍人選評二十頁）

この年の十月には、『塔創刊二十周年合同句集（第三集）玲泉』が刊行され、椿年の作品は四十句掲載されている。また、この頃、山梨旅行に出かけている。まだまだ壮健である。

# 山梨旅行

葡萄熟れて勝沼の空日々に澄む

（『限界』百七十六頁）

葡萄棚洩るる日筋のむらさきに

（『限界』百七十六頁）

（『みづうみ』第四六八号 昭和五十四年一月号 竿頭欄十頁）

昭和五十四年（一九七九年）、九十一歳から九十二歳となる年である。『みづうみ』の年頭の句は次のようである。「碌々と」とあり、もう世の中のお役には立てなくなっているというような表現であるが、どうしてどうして、第二句第三句に示されるように、農夫としても田園俳人としても、十分現役であろう。

碌々と九十二の春迎へたり 椿年

（『みづうみ』第四六八号 昭和五十四年一月号 頌春四頁）

打ち返す土黒々と夕畑

（『みづうみ』第四七三号 昭和五十四年六月号 支部句会報

みづうみ小山支部句会四月例会 沐人報 四月十四日 於菅原千代女居三十九頁）

（『みづうみ』第四七五号 昭和五十四年八月号 竿頭欄五頁）

代掻くや四囲の山影消されゆく

（『みづうみ』第四七七号 昭和五十四年十月号 竿頭欄七頁）

昭和五十五年（一九八〇年）、九十二歳から九十三歳となる年である。その年始めの句が第一句である。そろそろ自分の死に様という様なことも意識され始めている句である。第二句は、隠し仰せようもない最長老のような年齢となっている自分を淡々と吟じた句であろう。

苦しみのなき死を願ひ初詣

（『第二句集 限界』七頁）

長寿を祝福されし初句会

（『第二句集 限界』十七頁）

（『みづうみ』第四八三号 昭和五十五年四月号 竿頭欄五頁）

この年の四月には、曾孫の一人が小学校入学という、これも特別な長寿者のみが体験できる慶事を迎える。

一年生帰りましたと大声に

（『みづうみ』第四百八十五号 昭和五十五年六月号 竿頭欄五頁）

また、この年の出来事として、『みづうみ』第四八四号（昭和五十五年五月号）には「松本椿年翁句集より」という欄が設けられ、昭和四十五年（一九七〇年）四月八十二歳の年に刊行した『句集老稚』より、十六句が紹介掲載された（三十九頁）。

ほのかにも妻の佛墓洗う

（『みづうみ』第四九〇号昭和五十五年十一月号竿頭欄五頁）

お盆の墓参に、亡くなって二十五年たつ妻の面影を思い出している自分の姿を淡々と吟じている。

ちしろ老ゆ声かも眼鏡外し見る

（『第二句集 限界』百五十九頁）

（『みづうみ』第四九〇号 昭和五十五年十一月号 支部

句会報 みづうみ小山支部 十月例会詠草 十月八日 於

菅原千代女居 三十六頁）（『みづうみ』第四九二号 昭和

五十六年一月号 竿頭欄四頁 句評 葉蘭 二十六頁）

忌の僧のおでまし遅し末枯野

（『限界』百五十頁）  
（『塔』第二十三巻第五号 昭和五十六年五号 塔俳句小

笠原龍人選八頁）

昭和五十六年（一九八一年）、九十三歳から九十四歳となる年である。

古見豆人が主宰した俳誌『大富士』からの小山の俳句仲間がまたもや亡くなった。この頃になると、戦前からの『大富士』の小山支部からの俳句仲間が、相次いで亡くなっている。この年か前年、物故者として名前が登場するのは岩田柴人と小野虹人、二人の小山の俳人であった。それぞれの忌日は不明であるが、椿年の生家・自宅にも近い、小山町中島の勝福寺で、六月十日二人の追悼句会が開かれた。

勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会（六月十日）

追悼の句もなく梅雨の忌に待る

（『みづうみ』第四九九号 昭和五十六年八月号『限界』一二九頁）

九十三歳になっている椿年の感性和創作意欲は衰えを見せない。

莢豆の花紫に夏立ちし

（『みづうみ』第四九九号 昭和五十六年八月号 竿頭欄四頁）  
（『限界』百二十七頁）

莢豆の花は白が多いが、ささげや大豆、金時豆の花は紫の花もあるが、そんな微妙な花の色の違いを踏まえ、季節変化を捉えた椿年の句である。

また同じく、『大富士』以来の特に気のあった石田仏子が、この年の九月に亡くなっている。仏子は、昭和四十九年四月に埼玉県の和光市に転居しているので、葬儀は和光市の自宅で行われ告別式に椿年が出席できなかったと推定される。翌年、石田仏子の遺句集『仏子句集花筏』（一九九二）が出版されている。その末尾に諸家が寄稿している「まぶたとじれば」という追悼文の中に、和光市の葬儀に出席した松本雅九が寄稿している（二百十九～二百二十頁）。その中に、「（初七日にあたる）九月二十四日の納骨式は、小山町生土の乗光寺において施行され、お骨は町を見下ろす見晴らしのよい高台の墓地に納められました（二百二十頁）」とある。おそらく、その時には、椿年も列席したのではないかと考えられる。また、その諸家の寄稿の中に鈴木ひろしの記事（二百二十四～二百二十五頁）の中に「昨昭和五十六年十一月のある日、石田仏子さんの納骨法要が、生土の乗光寺で行われるとの話を聞いたので、はせ参じたところその昔の町内会の人々、俳誌『大富士』同人等等、多数の参列者の中に加わったのであるが、戦後の永い空白の年月が、ひしひしと迫り感無量という外なものでもなかった（二百二十五頁）」というものがある。仏子の亡くなられた日から起算すると、その年の十一月五日（木曜日）が四十九日にあたるので、おそらく十一月一日（日曜日）か十一月三日（祝日）にその四十九日法要もしくはお別れの会が行われた可能性が高い。納骨が、初七日の日であったのか、その四十九日法要の日であったかは判然としないが、仏子の遺句集の末尾にある佐野閑江「跋」（二百二十九～二百三十一頁）の遺句集出版の記述からは、初七日と推測するのが妥当であろう。また、縁故の俳人たちがその四十九日法要の日に追善句会を行った可能性が高い。また、その最初の墓は思ったより質素なものであった

と考えると、椿年のその頃に作句されたと推定される作品との整合性が出てくる。ちなみに、その俳号仏子は仏の弟子という意味で、若い特に自分でつけた俳号にしては、抹香臭い俳号といわれているので、その質素さが本人の遺志によるものと考えるのが自然であろう。菩提寺は、臨済宗円覚寺派の寺である。案外石田仏子の当初の墓は、椿年の句通りに目印に石を一つ置いただけの質素なものであったかもしれない。

昭和五十七年（一九八二年）、椿年九十四歳から九十五歳となる年である。この時期、うら寂しい墓地の様子を吟じた秀句が知られるが、一見いずれも石田仏子に関わる句とはいえないようにも見えるが、少なくとも第一句は仏子への追悼の句である可能性が高い。

墓と言うも草に露けき石ひとつ

（『みづうみ』第五〇四号 昭和五十七年一月号 竿頭欄四頁）

笹鳴や墓に立てある風車

（『みづうみ』第五〇六号 昭和五十七年三月号 竿頭欄四頁）

また、第二句は風車という道具立により、通常は幼くして亡くなった子どもに、笹鳴、つまり冬鶯が鳴いているなんともうら寂しい光景を吟じた句と解釈される作品であるが、想像であるが、もし仏子のお孫さんが寂しいお祖父さんに自分の風車を献じたというようなことがあったとすると、「さすがの仏子の墓もまるで子どもの墓のようになっていて、なおうら寂しい」という、椿年の作風に時

折見られる少しだけユーモラスな光景描写というところえ方もありえるのではないだろうか。少しユーモラスであるが、しかしものの悲しい秀句であらう。

椿年の仏子への追悼の句は、石田仏子の遺句集として翌年八月に出版された『花筏』（一九八二）の末尾にある諸家の「まぶたとじれば」に寄せた文章の末尾にも残されている。

枯れて尚菊は香りを残しをり 椿年

（同書二百十―二百十一頁）

次は、昭和五十六年の年末に作句したと推定される句である。超高齢である身にとって、年末の一日一日の過ぎていくのが重いという実感の籠もった句である。

行く年の一と日一と日が重くなる

（『樵』第八〇号 昭和五十七年四月号 青北風集九頁）

翌年の正月の初夢の句に、仏子の霊が夢枕に立ったという句が登場するが、大抵の縁者の死に際して喪の句を贈ってきた椿年にしては不思議な句である。

初夢や仏子は何も言はず覚む

（『みづうみ』第五〇七号 昭和五十七年四月号 竿頭欄五頁）

前年九月に亡くなった石田仏子が初夢の夢枕に立ったという句であらう。石田仏子は、二十歳年下の俳人で、小山町に在住時は大坂屋という屋号のある薬局で、しばしば句会が開かれていた。

鋤初の楔しつかり締めて立つ

（『樵』第八一號 昭和五十七年五月号 青北風集 十四頁）

この年の鋤始めの句である。農夫としても、まだまだ現役である。この年の四月、俳人の年譜記載事項として、四月の『第二句集 限界』の出版である。九十四歳にして句集の出版である。末娘と婿である松本栄・喜美子夫妻が、手伝ったものとはいえ、九十四歳の老人にとって大変な仕事であつただろう。それ故、最後の力を振り絞って仕上げた『第二句集 限界』と命名された。その苦心作の喜びは大きく、次の句によく表されている。また、同じ号の第二句は内曾孫の無事に育っていく姿を捉えた句である。また、その次の句は、この頃の次第に年老いていく自分の姿を巧みに表現した句である。

新刊の句集うららにページ繰る

初蝶を追う児足元覚束な

（『塔』第二十四卷第八号 昭和五十七年八月号 塔俳句 小笠原龍人選十二頁）

血も肉も涸れて生き居り風薫る

（『樵』第八六号 昭和五十七年十月号 青北風集 十一頁）

この年の八月、前年九月に没した石田仏子の遺句集『仏子句集花筏』が出版され、小山町の菩提寺で行われた一周忌の記念品として配られている。

忌の塔婆枝に坂道つゆけしや

『塔』第二十五巻第二号 昭和五十八年二月号 塔俳句  
小笠原龍人選十九頁

その前年の秋の作品と考えると、昭和五十七年九月、四歳年下の『大富士』創刊のころからの古い俳句仲間であった湯山逸素が九十二歳で没している。その追悼の句か、「つゆけしや」は湿めぼつたという意味であるが、湿らせているのは露だけだろうか。ただ、「枝」は塔婆の上部の刻み部分を指すと考えられるが、「枝」は「杖」の誤植の可能性はないだろうか。

なお、『第二句集 限界』掲載句の詳細な検討や昭和五十八年（一九八三年）以降の作品と出来事の分析は、紙面の関係で次稿に送るものとする。

## 謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫である松本喜美子・山崎京子・井上奈美江・松本典彦・松本時男の各氏による貴重な資料の閲覧許可とご証言が他の稿と同様、研究の基盤データとなっている。筆者の実兄宮川光司・早苗ご夫妻にも、貴重な情報をご教示いただいた。同じく、国立国会図書館・日本近代文学館・静岡県立中央図書館・俳句文学館・埼玉県立熊谷図書館・御殿場市立図書館の貴重な蔵書を利用していただいたことも記して感謝の意を表する。

## 引用文献

- 石田仏子 昭和五十七年（一九八二）仏子句集 花筏 私家版  
岩田沐人 昭和五十年（一九七二）松本椿年翁米寿祝賀句会の記 みづうみ、第四二二号（昭和五十年一月号）、三二～三三頁  
岩田沐人 昭和五十八年（一九七九）岳麓秋の句会記 みづうみ、第五二六号（昭和五十八年十一月号）、三七～三八頁  
藤田黄雲 昭和四十九年（一九七〇）原田濱人―俳句とその生涯―私家版  
古見豆人選 佐野閑江編 昭和九年（一九三四）大富士句帖 第一輯 啓仁館（昭和九年六月発行『大富士』第一巻第一号）第三巻第十二号 昭和六年一月～昭和八年十二月の掲載句から選句掲載  
古見豆人選 佐野閑江編 昭和十二年（一九三七）大富士句帖 第二輯 大富士吟社（昭和十二年十一月発行『大富士』第四巻第一号）第六巻第十二号 昭和九年一月～昭和十一年十二月の掲載句から選句掲載  
古見豆人選輯 昭和十五年（一九四〇）大富士句帖 第三輯 大富士吟社（昭和十五年八月発行『大富士』第七巻第一号）第九巻第十二号 昭和十二年一月～昭和十四年十二月の掲載句から選句掲載  
古見豆人 昭和十七年（一九四二）大富士風土記（續）駿河小山支部 大富士第十二巻第二号（昭和十七年二月号）、四四～四五頁  
古見豆人選輯 昭和十九年（一九四四）大富士句帖 第四輯 大富士吟社（昭和十九年十二月発行『大富士』第十巻第一号）第十二巻第十二号 昭和十五年一月～昭和十七年十二月の掲載句から選句掲載  
加納野梅編 昭和七年（一九三二）新草俳句集 野梅吟社（昭和七年十二月発行『新草』創刊号）昭和七年八月号より選句掲載



前田岳人 昭和二十四年（一九四九）句碑になるまで『塔』第一巻第

十一号 昭和三十四年 十一月号 九一〇頁

前田弥一（岳人）昭和四十年（一九六五）自選 岳人句集 私家版

松本椿年 昭和九年（一九三四）各地句座 駿河小山あゆみ句會 大富士、第四卷第十一号、一九頁

松本椿年 昭和四十一年（一九六六）私の雅号『みづうみ』第三二三号 昭和四十一年二月号 二〇頁

松本傳次郎（椿年）昭和四十五年（一九七〇）句集 老稚 私家版

松本傳次郎（椿年）昭和五十七年（一九八二）第二句集 限界 私家版

宮川充司 二〇一六 田園俳人松本椿年の生涯と作品―生涯発達心理学の観点から略年譜の試作― 椋山女学園大学研究論集 第四十七号

人文科学篇 四三―五九頁

宮川充司 二〇一七 田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）―明治大正期から終戦頃までのライフイベントと作品― 椋山女学園大学研究論集 第四十八号 人文科学篇 二三―四〇頁

宮川充司 二〇一八 田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）―昭和初期から昭和四十年頃（高齡期）までのライフイベントと作品― 椋山女学園大学研究論集 第四十九号 人文科学篇、二一―三六頁

宮川充司 二〇一九 田園俳人松本椿年の生涯と作品（四）―昭和四十年代（後期高齡期）のライフイベントと作品― 椋山女学園大学研究論集 第五〇号 人文科学篇、一一二〇頁

宮川充司 二〇二〇 田園俳人松本椿年の生涯と作品（五）―昭和三十年代から四十年代（前期高齡期・後期高齡期）のライフイベントと作品補足― 椋山女学園大学研究論集 第五十一号 人文科学篇、一七―二九頁

小笠原龍人編 昭和四十三年（一九六八）塔創刊十周年記念合同句集 星苑 塔俳句會

小笠原龍人編 昭和四十八年（一九七三）塔創刊十五周年記念合同句集

蒼穹 塔俳句會

小笠原龍人 昭和四十九年（一九七四）句集 孤灯 塔俳句會

湯山逸素 昭和四十四年（一九六九）逸素句集 私家版

\* 教育学部 子ども発達学科

## 資料一 松本椿年（傳次郎）年譜（改訂第五版）

年月	年齢	出来事
明治二十年 (1887) 七月	誕生	静岡県駿東郡中嶋村の旧家の三男として誕生（七月七日） 父親松本勘太郎（俳号吉野庵禾捨）四十五歳 母さく四十一歳 義兄紋次郎（俳号竹因）二十六歳、長姉まさ二十歳、次姉くら十二歳、長兄半治十歳、次兄啓作三歳
明治二十四年 (1891) 十月	四歳	義兄松本紋次郎と長姉まさとに長女りん生まれるが、翌明治二十五年（1892）一月早世
明治二十七年 (1894) 四月	六歳 六〇七歳 頃の冬	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校入学 父禾捨の句会の折、最初の朝寒の句を口ずさみ喝采 朝寒く茶袴茶碗の水りいし
明治三十一年 (1898) 三月	十歳	妹あき（勘太郎三女）誕生
明治三十二年 (1899) 八月	十一歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常小学校卒業 父親より俳号椿年を与えられ、この頃から句作 静岡県駿東郡六合村立成美高等学校進学 妹あき早世
明治三十四年 (1901) 一月	十二歳	同村の山崎伊三郎の養子となる
明治三十五年 (1902) 三月	十四歳	妹イワ（勘太郎四女）誕生
明治三十九年 (1906) 十月	十九歳	長兄半治室伏まつと婚姻
明治四十年 (1907)	二十歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校卒業 義兄松本紋次郎まさ夫婦、砂山のお（明治三十八年二月生一歳）を養女とする
明治四十一年 (1908) 二月	二十一歳	富士紡績小山工場勤務
明治四十三年 (1910) 十月	二十三歳	次兄啓作小野家（生土）に婚養子 六合村生土三十六番地に転居 山崎伊三郎との養子縁組解消、松本家に復縁 駿東郡北郷村山崎利三郎の次女すみと婚姻入籍 長女イマ誕生

大正二年 (1913) 七月	二十六歳	生家に近い小山町中島一八番地に転居 次女サク誕生
大正五年 (1916) 七月	二十九歳	妹イワ没（行年十五歳） 長兄半治妻まつ没（行年四十四歳）三男三女をなすがいずれも早世 母さく没（行年七十一歳 老衰）
大正六年 (1917) 九月	三十歳	分家（小山町中島六十二番地に居住） 長兄半治岩田やすと再婚
大正九年 (1920) 二月	三十二歳	三女志磨誕生 長兄半治四男紋地（嗣子）誕生
大正十年 (1921) 五月	三十三歳	長兄半治妻やす没（行年二十八歳） 長兄半治りょうと再婚 四女みどり誕生
大正十一年 (1922) 四月	三十四歳	五女愛子誕生
大正十二年 (1923) 九月	三十五歳	長姉まさ没（行年五十七歳） 父勘太郎没（行年八十二歳）
大正十四年 (1925) 三月	三十七歳	富士紡績小山工場労働争議
大正十五年 (1926) 六月	三十八歳	関東大震災 富士紡績小山工場被災 死傷者多数 富望主追悼句会天位（選者服部耕石） 供物たた霊棚の灯の揺らくのみ この頃から本格的に俳句を作り始める 富士紡績小山工場内に俳句部創部『蕪』創刊 この頃、加納野梅門下坂本緑村帰村 加納野梅坂本緑村宅訪問（昭和三年以前）加納野梅主宰『鬼栗毛』投句
昭和二年 (1927) 二月	三十九歳	長兄半治妻りょう没 長兄半治没（行年五十歳） 末子（六女）喜美子誕生

田園俳人松本椿年の生涯と作品（六）

昭和四年 (1929)	一月 四月	四十一歳	加納野梅月刊俳誌『新草』創刊 坂本緑村と投句 古見豆人駿東郡小山町立成美尋常高等小学校長に着任 古見豆人あゆみ吟社創設 古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰月刊俳誌『曲水』に投句 『曲水』第十四巻第十号（昭和四年七月号）に初掲載 大藪の明るさ見ゆる辛夷かな 夕風に春行く麥の戦きかな
昭和五年 (1930)	四月 六月	四十二歳	『あゆみ句帖』刊行 小山町立成美尋常高等小学校、小山町立第一尋常高等小学校に改称 昭和天皇静岡行幸 行幸に就き天覧糸の飾玉を作る とすれば汗ばめる手を洗いつつ『新草俳句集』
昭和六年 (1931)	一月 十月	四十三歳 四十四歳	古見豆人大富士吟社創設 俳誌『大富士』創刊同人 草庵新築 飾矢の鬼門差しぬる銀河かな（『曲水』第十七巻二三号）
昭和七年 (1932)	十月	四十五歳	富士紡績小山工場退社
昭和八年 (1933)	一月 四月	四十五歳	正月富士登山 雪中富士登山五句『曲水』第十八巻第四号の竿頭を飾る 吹雪く中に御慶かはして消えにけり （『曲水』第十八巻第四号） 末子喜美子小山第一尋常小学校に入學 木の芽 末子入學 広げたる本の句ひや木の芽晴れ （『大富士句帖第一輯』）
昭和九年 (1934)	九月	四十七歳	石田仏子あゆみ句会初参加
昭和十年 (1935)	一月	四十七歳	この頃から『曲水』への投句休止 義父逝く三句 凍土に放り出したる飾りかな 松とりし穴に立てけり門位牌 霜に立てて折れし線香や笹子鳴く （『大富士第五巻第三号（昭和十年三月号）』）

昭和十一年 (1936)	三月	四十八歳	小山第一尋常高等小学校教員大島源悟郎君溺死（三句） 水底の子を呼ぶ母や雲の峰 夏の草句はしく焚火煙けり 暮れんずる水に火映える河鹿かな （『大富士第五巻第十号（昭和十年十月号）』） 次姉くら没（行年六十三歳）
昭和十二年 (1937)	十一月	五十歳	日中戦争の勃発により甥紋地招集 秋雨を舉手にはじきて征きにけり（『大富士第八巻一号』昭和十三年一月号）
昭和十三年 (1938)	四月	五十歳	古見豆人小山第一尋常高等小学校長を退職し、湘南学園（高座郡藤澤町鶴沼）に異動 大富士吟社東京世田谷に移転 豆人先生送別句會 半こげしまま咲満ちし櫻かな （『大富士第八巻第六号』各地句座 駿河小山 豆人先生別句會四月二日小山第一尋常高等小学校被服室）
昭和十四年 (1939)	一月	五十一歳	初孫光弘誕生（辰雄イマ長男） 孫の尿膝にぬくとし今朝の秋 秋の灯や己がおならに怖ゆる兒 （『大富士第九巻第十一号』昭和十四年十一月号） 豆人師小山再来訪 本家甥紋地戦死
昭和十五年 (1940)	四月 五月	五十二歳	末子喜美子を松本本家の養女とする 長女イマの配偶者杉山辰雄と養子縁組（松本家嗣子とする） 甥紋地の遺骨と軍刀帰還 戦死せる甥の遺骨を迎えて（二句） 南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀 抱く遺骨脈うつるかに南風をゆく （『大富士句帖 第四輯』『大富士第十巻第八号』） 孫京子（辰雄イマ長女）誕生
昭和十六年 (1941)	二月 四月	五十三歳	次女サク婚姻 『大富士第十一巻四号』への投句を最後に投句休止 父八十六歳生前墓碑を建つ（二句）

宮 川 充 司

		冬風の入日ににじめり朱入文字 冬風や己が石碑にぬかつける 十二月のれんげ咲きけり霜の中
昭和十七年 (1942) 二月	五十四歳	孫奈美江（辰雄イマ次女）誕生
昭和十八年 (1943) 十一月	五十六歳	義兄紋次郎没（行年八十六歳）
昭和十九年 (1944) 二月	五十六歳	孫光弘早世（行年六歳）
昭和二十年 (1945) 十二月	五十七歳	三女志磨婚姻
昭和二十一年 (1946) 四月	五十八歳	次兄啓作没（行年六十一歳） 孫典彦（辰雄イマ次男）誕生（二月八日）
昭和二十二年 (1947) 四月	五十九歳	四女みどり婚姻 末子喜美子、山崎栄と婚姻（松本家の嗣子とする）
昭和二十三年 (1948) 五月	六十歳	『大富士』投句一時復帰（第十八巻第五号・十一号 第十九巻六号・十号）CHCによる大富士の検閲廃止 本家外孫卓美（松本栄喜美子長男）誕生
昭和二十四年 (1949) 四月	六十一歳	孫時男（辰雄イマ三男）誕生
昭和三十年 (1955) 五月	六十七歳	妻すみ逝去 行年六十九歳 老衰 老妻没す 三句 うなづけど目はうつろなり南風に灯す 子の孫の泣くを制して南風に付つ 師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ （『大富士』第二十五巻第七号 昭和三十年七月号）
昭和三十一年 (1956) 二月	六十八歳	湯山逸素細道會を起こし、俳誌『細道』創刊
昭和三十三年 (1958) 十月	七十一歳	外孫孝光早世

十一月		古見豆人没（十一月二十二日花石落忌） 俳誌『大富士』第二十五巻十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊
昭和三十四年 (1959) 一月	七十一歳	小笠原龍人『大富士』の後継誌として『塔』創刊
十一月	七十二歳	この年の内に『塔』同人として参加 俳誌『塔』第一巻第十一号豆人先生一周忌追悼号 追憶 とろ、飯亡き師の記録十二槐 豆人先生一周忌追悼俳句大会 十一月廿二日 池上曹禪寺 豆人忌の廻吟に追われ蜜柑むく
昭和三十五年 (1960) 十月	七十三歳	原田濱人龍坂峠句碑建立 句碑除幕式に湯山逸素の誘いで列席
昭和三十六年 (1961) 一月	七十三歳	原田濱人主宰の『みづうみ』同人参加 植ゑ進む苗木苗木の陽炎へる 括り桑解けて陽炎さかんなる （『句集 老稚』p.6）括り桑解けが陽炎広これり （『みづうみ』第二五六号 昭和三十六年五月号）
昭和三十八年 (1963) 十二月	七十六歳	義弟事故死 入寂の足の硬ばり北風す （『みづうみ』第二百八十九号 昭和三十三年二月号） 夜の落葉悲報に急ぐ道細く 風に狂ふ木の葉の中を極めく 昨日埋めし墓なれ木の葉はやたためて （『塔』第六巻二号 昭和三十三年二月号）
昭和三十九年 (1964) 一月	七十六歳	孫京子婚姻 とつぐ娘の門出初東風めぐる石 （『塔』第六巻第三号 昭和三十三年三月号） 仏だんの春灯に震え角かくし 春寒や嫁ぎめく娘の別れ言 （『塔』第六巻第六号 昭和三十三年六月号） 湯山素鷗没（三月十一日素鷗忌） 喜寿の祝 七夕の笹影に居て喜寿の膳 （『みづうみ』第二百九十七号 昭和三十三年十月号）
三月 七月	七十七歳	

田園俳人松本椿年の生涯と作品（六）

昭和四十年 (1965) 三月	七十七歳	初曾孫（孫京子長男）誕生 湯山素鷗一周忌追善句会 素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影 花冷や句碑にたつぶり手向け酒 〔みづうみ〕第三百十号 昭和四十年十一月号 孫奈美江婚姻 光り合うて二尾の若鮎瀬を遡る 〔みづうみ〕第三百十号 昭和四十年十一月号 初曾孫の句 庭若葉笑いおほへし児を腕 〔塔〕第七卷第八号 昭和四十年八月号 初曾孫初節句 尾を富士へ箱根へ振って鯉轡 〔塔〕第七卷九号 昭和四十年九月号 前田岳人『自選 岳人句集』刊行 嗣子辰雄病没（行年五九歳 九月二十二日没） 嗣子淋巴腺肉腫にて逝く 秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声 〔みづうみ〕第三百十二号 昭和四十一年一月号
昭和四十一年 (1966) 一月	七十八歳	菩提寺勝福寺住職突如入寂 明けきらぬ山門凍ての固き踏む 〔塔〕第八卷第五号 昭和四十一年五月号 豆人先生句碑の除幕 五月八日ゆかり深き金時神社にて 献詠句（大富士句碑） 秋晴や水に影もゆ社の朱 〔塔〕第八卷第七号 昭和四十一年七月号 大島旅行 梅雨日眩しあんこと並び撮られ居て 〔みづうみ〕第三百二十二号 昭和四十一年十一月号 二人目の曾孫（内孫京子長女）誕生
昭和四十二年 (1967) 十二月	七十九歳	親族事故死（十二月二十八日） 元日や床に据えたるお骨壺 〔塔〕第十卷第六号 昭和四十三年六月号 会葬者揃う間庫裡のストロブへ

昭和四十三年 (1968) 九月 十一月	八十一歳	葬り来て浄めの手塩餅に入む 〔みづうみ〕第三百四十二号 昭和四十三年七月号 塔俳句会『塔創刊十周年合同句集 星苑』刊行 初曾孫袴着 袴着の拍手小さく響きけり 〔塔〕第十一卷第二号 昭和四十四年二月号 三人目の曾孫（内孫奈美江長男）誕生 四人目の曾孫（内孫京子次男）誕生 〔句集 老稚〕出版
昭和四十四年 (1969) 八月 九月	八十二歳	病床の原田濱人を門弟と見舞う 師をかこみ小春の障子開けて撮る 手に残る師の握力や小春風 〔みづうみ〕第三七五号 昭和四十六年四月号 父松本松本勘太郎（俳号吉野庵禾給）の句碑松本本家に建立 初日の出月をうしろに拝みけり 禾給 冬晴の句碑自宅前庭に建立 冬晴や底藻さやかに動き居り 椿年 菩提寺勝福寺晋山式 晋山の経に天風来て薫す 〔塔〕第十三卷第十二号 昭和四十六年十二月 塔俳句 小笠原龍人選十三頁 円覚寺舍利法式団参 管長の一喝凛と冴え渡る 法悦や鎌倉山の月まろし 〔塔〕第十四卷第一号 昭和四十七年一月号
昭和四十六年 (1971) 四月 五月 九月	八十三歳	小山町大水害（七月十二日） 田も畑も川原となりて虫すたく 決潰のダム底幽し尽の虫 〔塔〕第十五卷第四号 昭和四十八年四月号 〔みづうみ〕主宰原田濱人没（八月四日 八十八歳） 五人目の曾孫（内孫奈美江次男）誕生
昭和四十七年 (1972) 七月 八月	八十五歳	

宮 川 充 司

九月 十月	八十五歳	昭和四十八年 (1973) 三月	芹沢風外没 法師蟬水さびてゐる墓茶碗 〔みづうみ〕第三九六号 昭和四十八年一月号 伊勢団体バス一泊旅行 宿の卓仏子と二人十三夜〔第二句集 限界〕一四七頁 〔みづうみ〕第三九八号 昭和四十八年三月号 前田岳人没 行年八十七歳(二月二十八日) 次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ 花冷えの土かけて永遠の別れかな 〔みづうみ〕第四百二号昭和四十八年七月号 塔俳句会『塔創刊十五周年合同句集 蒼穹』刊行
九月	八十六歳	昭和四十九年 (1974) 一月	六人目の曾孫(内孫奈美江長女) 誕生 赤児見に草餅搗いてそばもつて 〔みづうみ〕第四一二号 昭和四十九年五月号 米寿の祝 子孫曾孫うらかに顔を揃えけり 〔塔〕第十六卷第八号 昭和四十九年八月号 石田仏子和光市に転居 五月十九日中島公民館で送別句会 家督を嫡孫典彦に譲る 孫にゆずる登記すまし月涼し 〔塔〕第十六卷第十一号 昭和四十九年十一月号 みづうみ小山支部による松本椿年翁米寿祝賀句会 藤曲公民館(十二月一日) 霜濃ゆく降りしゆふべの焚火跡 〔みづうみ〕第四二二号 昭和五十年二月号 小山支部 〔松本椿年翁米寿祝賀句会の記〕
十二月	八十七歳	昭和五十年 (1975) 六月	『塔』『翠雲抄』に作家として取り上げられる青空を背負い腕を背麦を踏む 年毎に歟重くなり畑打ち 〔塔〕第十七卷第六号 昭和五〇年六月号 植うる田の一角富士の雲落とす 電蒼く解けつつ草の根に溜る 会葬者老人多し栗の花 〔椎〕第一号創刊号 昭和五十年九月 椎集 孫典彦婚姻 静岡県知事杯賜杯
十月 十一月	八十八歳		

九月 十月	八十八歳	昭和五十一年 (1976) 一月	いみじくも知事杯賜う天高し 〔塔〕第十八卷第二号 昭和五十一年二月号 曾孫がさらに増える また一人曾孫が増えたる年迎ふ 〔塔〕第十八卷第五号 昭和五十一年五月号水煙集 同人 作品三十三頁
五月 六月	八十九歳	昭和五十二年 (1977) 三月	内曾孫のお喰い初めと初節句 春の月児に喰ひそめの茶碗買ふ 〔塔〕第十九卷第九号 昭和五十二年九月号 よちよちと庭に出し児や鯉職 〔塔〕第十九卷第八号 昭和五十二年八月号 中川温泉旅行 温泉窓開ければ聞こゆ河鹿の音(中川温泉) 〔塔〕第十九卷第十号 昭和五十二年十月号 葎山旅行 秋風へでんと大白据へてあり(江川代官屋敷四句) 〔塔〕第二十卷第一号 昭和五十三年一月号
十月	九十歳	昭和五十三年 (1978) 十月	『塔創刊二十周年合同句集(第三集 玲泉)』四十句掲載 山梨旅行 葡萄熟れて勝沼の空日々に澄む〔限界〕百七十六頁 葡萄棚洩るる日筋のむらさきに〔限界〕百七十六頁 〔みづうみ〕第四六八号 昭和五十四年一月号 曾孫の一人小学校入学 一年生帰りましたと大声に 〔みづうみ〕第四八五号 昭和五十五年六月号 〔みづうみ〕第四八四号(昭和五十五年五月号)に「松本椿年句集より」の記事が掲載
四月 五月	九十二歳	昭和五十五年 (1980) 四月	勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会(六月十日) 追悼の句もなく梅雨の忌に待る 〔みづうみ〕第四九九号 昭和五十六年八月号〔限界〕一二九頁 石田仏子没(九月十八日) 行年七十四歳 石田仏子追善句会(小山町生土乗光寺) 墓と言ふも草に露けき石ひとつ 〔みづうみ〕第五〇四号昭和五十七年一月号
六月 九月 十一月	九十三歳 九十四歳	昭和五十六年 (1981) 六月	



田園俳人松本椿年の生涯と作品（六）

昭和五十七年 (1982) 四月	九十四歳	『第二句集 限界』出版
八月	九十五歳	『仏子句集 花筏』没後出版
九月		湯山逸素没 行年九十二歳 忌の塔婆枝に坂道つゆけしや 〔塔〕第二十五卷第二号 昭和五十八年二号 塔俳句
昭和五十八年 (1983) 十月	九十六歳	俳誌『みづうみ』岳麓秋の句会（一日足柄峠回吟、二日麓の民宿山久荘で句会選者となる）
昭和五十九年 (1984) 一月	九十六歳	俳誌『塔』投句絶筆 吹き飛ばすばかりの風や青簾 信玄の案山子目をはる甲斐路かな 〔塔〕第二十六卷第一号 昭和五十九年一月号
九月	九十七歳	俳誌『樵』投句絶筆 夏めける空を編みをり朝の蜘蛛 薫風や名なき一瀑木々を打つ この土地の清水はみんな富士よりす 〔樵〕第百九号 昭和五十九年九月号 曾孫成人の祝い 祝吟 大木となるも一つの实からなる 岩沢露萩追善句会 十二月九日 於小山町萱沼甘露寺
昭和六十一年 (1986) 二月	九十八歳	行年百歳にて逝去 絶吟 春風に乗つてゆかばや句の行脚

